

平成13, 14年度「教養演習」の実施と結果について

Report of “Introductory Seminar” conducted in 2001 and 2002 academic year

望月久也¹⁾ 久保健助²⁾

Hisaya MOCHIZUKI and Kensuke KUBO

Abstract

Today, many universities have introduced “Propaedeutic”. The cause of the introduction is the “universalization” of higher education resulted from the decline in the population of those age 18 and the growing percentage of those going on to universities.

Universities are now required to take care of their students from more diversified aspects than they used to be, such as their declining academic achievement, their attitudes for lectures and motivation to learn as well as their interests in society.

Under the circumstances, JWCPE set up and implemented a new “introductory seminar” for freshmen from the first semester of 2001 through 2002 academic year. This seminar is characterized by its small class size. This type of seminar could be put into practice once more in the next few years.

This article will observe the seminar in reference to how those seminar classes were conducted and what the students reactions were.

keywords : *propaedeutic, universalization, introductory seminar*

はじめに

I 本稿の目的

私立大学636学部を対象とした最近の調査^{*1}によれば、「導入教育」ないし「入門教育」と呼ばれうる何らかの教育^{*2}を既に実施している学部は511学部(80.3%)、実施を予定ないし検討している学部は60学部(9.4%)である。また、既に実施されている導入教育の多くは、1990年代以降に開始されたものであるという。

こうした状況の背景には、まず、18歳人口の減少と大学進学率の上昇による高等教育の「大衆化」現象の存在が考えられる。すなわち、学生の学力低下をはじめ、学習意欲、受講態度、社会的関心など多くの面で、大学がこれまでにない学生への対応を求められているのである。

こうしたなかで本学では、平成13年度前期に、一年生を対象に比較的少人数での新たな「演習」科目を設

定し、同14年度まで2年にわたってこれを実施した。平成15年度からはカリキュラム編成が大幅に改訂されるため、当該演習は、形式的にはこれで終了する。

しかし、同演習が実施されるに至った上記の事情はむしろその度を増しつつある。従って、将来的にも同様の趣旨での演習が実施・継続される可能性もあろう。

本稿は、①「教養演習」の実施状況と、②同演習に対する学生の反応とを記録し、③それらの記録にもとづく若干の考察を行なおうとするものである。わずか2年の、しかも非常に短い期間の準備のみで始められた演習に関するものではあるが、将来の同種の教育に多少なりとも資するところがあればと考えてのことである。

また、筆者兩名はそれぞれ美術、憲法学を専門とする教員であり「導入教育」を論じるに適任とは思えない。しかし、少人数制の導入教育を標榜すれば、将来的にも専門外の教員による担当は不可避であろう。したがって、当該演習の立案に直接間接に関与し、また両年度とも担当者の一員として実施にあった専門外の教員として記録を残しておくこともあながち無意味ではなからうと考える。

1) 日本女子体育大学講師

2) 日本女子体育大学助教授

なお、本稿は執筆者兩名が全編にわたり検討、確認したうえで提出するものであるが、最終的な執筆責任は次のように分担した。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの2は望月、Ⅲの1・Ⅳは久保。

Ⅱ 演習の立案、実施の概要

1. 「教養演習」実施にいたる経緯

平成12年10月11日づけの教務委員会資料に、審議事項として以下のような記述がある。本演習立案・実施の起点といえることができる。

1. 新規科目の追加について

- ①本学学生の学習姿勢の現状を考慮し、FDを図る目的で、全専攻共通のカリキュラムの充実を来年度から図る。
- ②学生が自己の関心や興味についてまともに考え、社会状況も理解して、自己の将来をきちんと考えるようにし、その上で自己の将来を見据えた大学での学習姿勢の形成を図ることを目的とした、演習形式の科目を、一年の前期（必要に応じて後期も）に設定する。名称案「職業概論演習」「教養演習」など。検討中。
一般教養科目の中に入れる。必修にはしないがなるべく学生が受講するように薦める。15年度以降は必修も考える。また、15年度以降はさらなる充実やエクストラカリキュラムとの連動も考える。
- ③複数の教員が担当し（8人程度）、少人数の学生に対して、ディスカッションなどを取り入れ、自己探求をする演習形式の授業とする。全員が取っても各クラス20人以内に行えるようにする。
- ④担当科目数の少ない教員（6ポイント前後の先生方）に積極的に担当していただく。特任の先生方で授業担当数の少ない先生方にも担当をお願いする。来年度担当数が6ポイント程度の先生方には4ポイント相当分程度入っていただく。
- ⑤科目の責任者はシラバスを作成し、各担当者はシラバスを基準に各教員のこれまでの経験などを生かして学生に自覚を持つような教育をして頂く。

2. 本演習実施の目的

平成13、14年度前期に実施された「教養演習」は、おおむね上記資料の内容に沿って企画・実施された。シラバスでは、本演習の目的は次のように説明されている。

【目的】この演習の第一の目的は、学生ひとり一人が次の問いに対する答えを確認することにある。すなわち、「あなたは＜何を＞学ぶためにこの大学に入学してきたのか？」という問いである。この問いに対する答えが曖昧であれば、この先の学習・研究の方向性もハッキリとは決まらない。ひいては、貴重な4年間を何となく過ごしてしまうことにもなりかねない。

上の問いに対する答えを見出す前提として、「あなたは＜何のために＞学ぶのか」ということが明確にされなければならない。多くの人にとってこの点は、「将来自分はどのような職に就こうとするのか？」という問いと重なるであろう。この演習の第二の目的は、卒業後の進路についての展望を明らかにするという点にある。

さて、＜何のために＞＜何を＞学ぶかという、上記問いに対する答えは既に明らかだという人でも、そのための方法・技術にとまどう場合は少なくない。この演習の第三の目的は、こうした方法・技術、すなわち大学で＜どのように＞学ぶかについての基礎を身につけるということである。

本演習の第一の目的は、新入生に本学に入学した目的を自覚・明確化ないし再確認させて、積極的な学習・学生生活の動機づけを行うことである。これは自発的・積極的に本学を志望して入学してきた学生にとっても意味のあることであろうが、冒頭にも述べた大学の「大衆化」状況の下、本学に入学してきた、進学動機・本学への志望動機が必ずしも明確とは言えない新入生（「不本意入学」者あるいは「無自覚入学」者とも呼ぶべき学生）にとってはいっそう重要なものといえる。

本演習の第二の目的は、就職に対する意識・関心の喚起におかれている。従来、本学学生の就職活動は、その始動時期、ノーハウの習得につき必ずしも満足すべき状況にはなかった。それは遡って考えれば、就職活動自体への関心の薄さ、ひいては自身の将来への展望のなさに起因することが推測された。本演習はこの点に対応しようとする。

そして第三は、大学での学習に必要な諸技術の初歩的訓練である。上記二点を実行する中で、少人数での討論、文献その他からの情報収集技術、レポート作成等の初歩を身につけさせることである。

以上をまとめれば、すなわち「何を」「何のために」

「どのように」学ぶか、をしっかりと自覚させることが本演習の目的であるといえる。

3. 本演習の実施概要

①全員履修 この演習は、「必修」ではないが、履修指導の徹底により、両年度とも実際には新入生全員が履修することになった。

②実施単位の規模 この演習が当初から「少人数の学生に対して、ディスカッションなどを取り入れ、自己探求をする演習形式の授業とする。全員が取っても各クラス20人以内できるようにする」よう考えられていたことは上述の通りである。

そこで演習実施のためのグループ分けであるが、各専攻を学籍番号順に下記のように「機械的に」（正規のA, B, C……という組わけにはこだわらず）分割した。

平成13, 14年度合計、各22ユニット、21ユニット（分割された各グループを以下では「ユニット」と呼ぶ。正規の組（ときにクラスとも称される）と区別するため）であった。

専攻ごとのユニット分割数

*（ ）内は1ユニットあたりの平均学生数

	平成13年度	平成14年度
スポーツ科学	9 (33)	8 (33)
舞 踊	3 (32)	3 (30)
健康スポーツ	8 (24)	8 (28)
幼児発達	2 (30)	2 (24)

③担当教員と担当ユニット数など 両年度とも本演習を担当した教員は10名で、専任・特任を問わず、「担当授業コマ数の少ない教員」を原則に、10名をピックアップした。

平成13年度には、4ユニットを担当する教員1名、同3ユニット4名、2ユニット1名、1ユニット4名、平成14年度は、同3ユニット5名、2ユニット1名、1ユニット4名であった。担当学生数としては、平成13年度は最高で一教員が4ユニット108名とならざるを得なかった（なお、平成14年度は最多でも一人3ユニット96名におさまった）。

教員の所属専攻と担当学生の専攻とは必ずしも一致させなかった（例、スポーツ科学専攻所属の教員が、健康スポーツ専攻の学生のユニットを担当）。

④演習の内容及び形式 各回の演習内容について

は、シラバスに本演習の「方法」として示された概要をもとに、詳細は各担当教員がそれぞれに構想・実行した。

シラバスで学生に提示した本演習の「方法」と「評価（の基準）」は次のとおり。なお、文中で用いている言葉の説明を合わせて示しておく。

【方法】15回にわたる演習のゴールは、各自の「近未来計画」についてのレポートの提出（以下、「計画レポート」という）である。その内容は、自分はこの大学において四年間で＜何のために＞＜何を＞学ぶのか、そして、卒業後それをふまえて社会にどのように貢献して行くのかについての各自の計画及び展望である。各回の演習はこのレポートを完成させるためのステップである。

4月から5月にかけての演習では、小グループに分かれての「小討論」を行う。論題は前の週に決めておく（具体的には「私の就職と結婚」、「フリーターという生き方について」などが考えられる）。討論後その内容について、各小グループの代表者が全体に発表する。各時間の最後に各自気づいたこと、考えたことなどを、「メモ（覚え書き）帳」にまとめて記入し、担当教員に提出する。

（中 略）なお、「計画レポート」完成までには、本学の図書館、情報処理センター、研究室などでさまざまな「情報を手に入れる技術」（それぞれの利用方法や必要とする具体的な情報の探し方など）を身につける機会を設ける。

【評価】最終的に提出されたレポートの内容に加え、どれだけ熱心に演習に参加し、目的の達成に努力したか（出席の有無はもちろん、各回の課題への取り組み、「覚え書き」の提出、分担した役割の遂行状況等）などをポイントに評価する。

【ことばの説明】

「グループ討論」とは…7～8人をひとグループとし、司会・書記をきめてテーマについて意見を出し合う。討論の結果について、各グループの代表が全体に報告する。前の週に、次週のテーマと論点を配布するので、それを参考に意見を用意してくる。

「輪読会」とは…やはり7～8人を1グループとし、司会・書記をきめて文献を代わる代わる音読しつつ読み進む。疑問点、関連する話などを随時出し合う。各グループの代表が結果を全体に報告する。文献のコピーは前の週に配布するので、よく読んで、不明

の語句などを調べておく。

「近未来計画」とは…以下①～⑤のことがらについて、2000字(400字×5)程度にまとめて、5月末に下書きを提出、担当教員の指導、プレゼンテーション、手直しなどを経て、演習の最終回に提出するレポート。

①自分が大学に進学した目的、②これから4年間何を学ぼうとしているのか、③どのような職業になぜ就こうと考えているか、④そのためには、いつごろからどのような準備が必要か、⑤目標を実現し、大学生活を充実させるためにはどのようなことが大事か。

「プレゼンテーション」とは…5月末～6月はじめに提出した「近未来計画」の下書きにつき担当教員の指導を受けたうえで、一人5分程度でその内容を全員の前で報告すること。

「覚え書き」とは…毎回演習の終了前にその時間の演習内容等を記入する用紙、教員が回収し、次週コメントをつけて返却するので、各自まとめて保管すること。

つぎに、筆者が担当したユニットでの実施例(平成14年度分)を資料として掲げておく。

稿末資料①「『教養演習』実施予定表」参照
実際に実施できる時間は、祝祭日の関係もあり、12回であった。担当教員によっては、プレゼンテーションを一定人数に限定するという実施例もあったが、5分程度の機会を全員に与えると3回は必要となる。

稿末資料②「各回の進行表」参照

稿末資料③「予習用紙」参照

予習用紙を工夫し各回の進行を詳細に準備しておくほどに、教員の演習時間内における「持ち時間」は少なくなり、もっぱら舞台回しに専念すべきこととなる。むしろ、如何にテキパキと指示し、総括を行なうかこそが問題となる。

稿末資料④「『覚え書き』用紙」参照

毎回配付して、翌週必ず返却する。演習内容を各時間の終了時に確認させ、感想・意見・疑問などを教員に伝え、教員はこれに対応する(コメントを付して返却するなど)ことを目的としたものである。

Ⅲ 学生の反応

---アンケート(平成13年度分)の結果及び担当者の感想

1. アンケートの結果から

①アンケートの目的と内容 いうなれば暗中模索の状態を開始した「教養演習」が、学生たちにどのように受けとめられているのか、とりわけ、少しは「役に立つもの」と感じられているのかを多少なりとも客観的に確認し、出来ればその結果を次年度の演習内容改善につなげようという趣旨でアンケートを行なった。

アンケートの内容は稿末資料⑤の通りである。1～10は本演習の目的に対応するものであり、うち1～5は進学・学習の目的及び就職に関する意識、6～10は学習技術の習得に関する設問である。11～15は主として少人数で実施したことへの反応をさぐる設問であり、16～20は担当教員に関する設問、21～25は演習全体への印象を問うものである。

②アンケートの実施 各担任に対し、最終回に実施していただきたいこと、結果はご本人が参考にされるほか、できれば筆者にも閲覧させて欲しいこと、実施者本人が特定される形での公表や第三者への開示は行なわないこと、を明記して、7月初旬に各担当者に配付。演習の時間中に担当教員本人又は教務補助員が配付・回収する形で実施された。

担当教員10名中7名分、全22ユニット646名中14ユニット377名分を集計対象とすることができた。回答が得られた専攻別ユニット数と学生数は次のとおり。

()内は各専攻の受講学生数。

スポーツ科学	6ユニット	181名(299)
舞 踊	1ユニット	31名(96)
健康スポーツ	5ユニット	111名(191)
幼児発達	2ユニット	54名(60)

③アンケートの結果 得られたデータについては様々な分析が可能であろうが、紙幅の関係上、ここではさしあたり2点を指摘したい*3。

3又は4という回答を肯定的回答、1又は2という回答を否定的回答と呼ぶことにすると、全体としては、ほとんどの項目について肯定的回答が三分の二を超えている(但し設問15は、いずれの回答も肯定・否定と判断し難いためここでは除外して考察する)。

肯定的回答が三分の二を下回ったのは、設問20(59.5%。教員は私のことを一人の個人として関心を示し尊重した)と設問24(43.4%。こうした演習は、前期だけでなく後期まで行なった方がいい)である。

まず、このうち設問20については、大教室との比較では少人数とはいえ、なお教員との個人レベルでの接

触は十分には出来なかったと見るべきであろうか。そこで実施単位（1ユニット）あたり最大人数（35名）のスポーツ科学専攻と、最小人数（23名）の健康スポーツ専攻の回答を比較してみる。肯定的回答は、スポーツ科学専攻が52.5%であるのに対し、健康スポーツ専攻では73.5%である。

さらに、1ユニット当りの学生数が回答に比較的強く作用するのではないかと想像される他の設問についても見てみよう。

例えば、設問11（教員と身近に接することができた）、設問13（大人数の講義と違い少人数だからよかった）、設問16（教員は学生と効果的にコミュニケーションを行なった）のそれぞれについて両専攻の肯定的回答を比較すると次のようになる。

	スポーツ科学専攻	健康スポーツ専攻
設問11	51.9%	71.1%
設問13	86.7%	93.1%
設問16	60.2%	74.7%

いずれの回答においても、1ユニット当りが少人数で構成されていた健康スポーツ専攻の方がかなり高い割合を示している。

上述のとおり、本演習の当初の案においては、20人以下の少人数での実施が構想されていたのであり、より充実した結果を得るためには、いっそうの少人数化が必要であろうと考えられる。

第二に、設問24であるが、肯定的回答が半数以下と他の設問に対する回答と比べて、きわめて低い数値である。

いくつかの可能性が考えられる。例えば、本演習で意図された目的が半期間でほとんど達成されたと感じられたため、これ以上の実施は不要と判断した結果という理解がありうる。他方、グループ討論、輪読会、プレゼンテーションなどがいずれも複数回実施されるため、その内容とも相まって、いうなれば一種の「飽きが来た」状態となっているという理解もあり得る。

もっとも、他の設問への回答、とりわけ設問25（この演習を履修してよかった）への回答に現れているように、半期間に行なわれた演習内容についてはかなりの好評価がなされている。

また本来、導入教育の内容は多岐にわたりうるのであって、決して半期だけでマンネリ化したり、種が尽きたりという類のものとは考えられない。してみれば、この設問の回答については、導入教育を——より広く深い内容をもって——一年次前・後期通して実施しよ

うと考える場合に、演習の方法・内容の選定・展開などに十二分な配慮をなすべく注意を喚起するもの、と理解すべきではなからうか。

設問24, 25に対する肯定的回答の割合

	スポーツ科	舞踊	健康スポ	幼児
設問24	35.9%	48.4%	43.7%	64.8%
設問25	72.3%	87.1%	88.5%	94.5%

2. 担当者の感想から

ふた学年、延べ7ユニットを担当した筆者（望月）の、あくまでも限られた範囲での印象である。初めに、学生の本演習への取り組み姿勢の学科別特徴と、対処の観点を述べたい。

まず運動科学科にみられる傾向の一つとしてとして、専門の競技力の向上に強い目的意識を持ち、そこに学生生活を傾注するものの、それ以外の事柄に向ける余力があまりない点が挙げられよう。専門以外の学習、特に教養的なものにはあまり関心がもてず、レポートやプレゼンテーションに対する能力も差し当り必要と感じていないため、本演習においても、当初前向きでなく動機付けに苦勞させられるタイプである。

また全体的に、クラブなどでの強いつなかりに比べ、クラスやユニットという集団への帰属意識は薄いようで、教師側で意識的にてこ入れを行わないと、ディスカッション等が表面的なものに終わることもあった。ただ、各ユニットの構成員数がスポーツ科学、舞踊学両専攻ともに30名を超えており、実施状況そのものがやや厳しいこともある。

これに比べるとスポーツ健康学科は、1ユニット25名前後と幾分小規模で、クラスやユニットに対しての帰属意識もやや強く感じられる。これはクラブ等への参加率が低いせいもあろうが、特に今（平成14）年度はフレッシュマンセミナーでのクラス単位の活動による影響がみられた。

ただ健康スポーツ学専攻には、本学での学生生活に目的意識を持てなかったり、不本意な入学であった者も散見される。そのための助言指導には、専攻の特色やカリキュラムについてのしっかりした把握が不可欠であり、一定の専門性も必要であろうが筆者は不十分であった。

また逆に、幼児発達学専攻のように学習に一応の目的意識がある場合には、目線を職業教育的ハウツーにとどめず、高等教育の本質への方向付けを心掛けねばならないと思われる。

IV. まとめにかえて

以下、2年間の演習の実施経験とその後のアンケート調査結果をここまで記してきて、今後の課題として認識される若干の点を私見とともに列挙して、本小稿のまとめにかえることにする。

①導入教育を必修とすべきか。

必修とすべきであろうというのが私見である。というのも、大学での学習・その後の進路につき、あらためて確認の場を必要としないほど明確かつ確固とした意識を持って入学してくる学生は今日ではきわめて稀であると思われるからである。

「大学生に、何もそこまで手取り足取りしてやらなくとも……」式の異論もよく聞かれるのである。しかし、こうした見解は今日の多くの大学（本学を含む）における学生の現状に対する全くの無理解・不見識ないしは意図的な無視の所産に他ならない。

ただし、現実的な問題として、必修である導入教育の単位を取得できなかった学生が次年度以降に再履修することになるのであるが、こうした学生をどう扱うかという問題がある。

②実施規模（1ユニットあたりの学生数）をどうすべきか。

1ユニットあたり20名以下に押さえるべきであろうというのが私見である。

個々の学生と教員との間で一定のやりとりを継続的に行なうことは導入教育の本質からしておそらく不可欠のことといえよう。すなわち、導入教育は、単なる知識・情報の伝達に止まらず、学生の人格レベルにかかわる課題を内包しているからである。

たとえば、毎週、学生が書いた文書を読み、必要なコメントを付して次週返却する。こうしたやりとりが重要なものとなるが、たとえ短い文章に対する簡単なコメントであっても、これを毎週継続するには自ずと物理的限界がある。

他方、グループ討論、プレゼンテーションなどが一定規模の人数の存在を要することも事実であり、少人数にすぎることとも問題であろう。現行担任制度における（おそらく、学生数を現有教員数で除した数と思われる）一クラス分程度が実際の目安ではなかろうか。

③内容をどうするか。

本演習の一つの際だった特色は、導入教育のなかに就職活動ないし卒業後に関する意識・関心の喚起という目的を織り込んだことにある。これは、本演習の立案時点での経緯による偶然の結果ではある。

多くの大学の例では、グループディスカッション、レポート、プレゼンテーションなどの技術を学ぶ場での課題が各担当教員の専門分野や一般的な時事・社会問題に求められている。それはそれで有益な面もあろうが、すべての学生が否応なく直面せざるを得ない「就職」、「卒業後」を課題とした各技術の習得過程は大いに有益なものと言えるのではないか。

また、導入教育の内容としては、専門教育への橋渡しの内容的演習などが含まれる場合がある。そうした場合には各担当者の専門を取り込んだ課題がいつそう意味を持つのであろう。

しかし、せめて一年次前期の演習においては、そうした内容までは欲張らず、全専攻に共通する課題や技術に内容を限定すべきだ、というのが私見である。

ただし、上記アンケート結果の分析では触れなかったが、当該アンケート結果を見るとほとんどすべての設問について、肯定的回答の割合が、スポーツ科学専攻において低く、幼児発達学専攻において高いという傾向が見られる。

できるだけ共通の内容に限定するとしても、専攻ごとに一定の調整は必要かも知れない。

*1 山田礼子ほか「私立大学における一年次教育の実態——『学部長調査』(平成13年)の結果から」(京都大学高等教育教授システム開発センター平成14年9月14日「公開研究会」参考資料より)。同調査は、平成13年10月から11月にかけて、全国の私立大学1170学部の学部長を対象に実施されたものである。

*2 「導入教育」といわれるものは、様々な形態、内容を持つ場合があるが、一応の定義として次のように言われている。「①高等学校までに習得すべき内容の補習教育、②論文の書き方などを中心としたスタディ・スキルの教育、③スチューデント・スキル(大学生に求められる一般的常識や態度)の教育、④専門教育への橋渡しとなるような基礎的知識・技能の教育、の4つの面を涵養する一年次教育」。前掲註1資料より。

*3 アンケート結果については、平成14年度受講生分の結果と合わせて、別途分析・検討する予定である。

*本稿は、平成14年度共同研究費の給付を得て実施した研究の成果である。

(平成14年9月24日受付)
(平成14年12月12日受理)

第一回	オリエンテーション この演習の意味、自己紹介	オリエンテーション 内容	ストアップオオツ チ、次週の予習 用資料を持参。 注意点
時間経過			
0～5	挨拶、出欠確認	担当教員の名前と顔が一致 するよう印象づける	
5～20	この演習の意味、進 め方	簡潔に、しかも分かり易く。 長くなりすぎないように。	シラバス（全回 分の日程表、必 要事項を記した 文書）を配布す る
20～25	グループ分け	何らかの基準（例えば血液 型）を基準に5～7人ずつ の小グループに分ける。	
25～45	小グループ毎の自己 紹介。一人おおよそ2 分。	全員にメモを採らせながら。 自己紹介終了後、くじで各 グループから代表を選び、 全員の前で、自分のグルー プのメンバーを紹介してもら う。誰が当たるかわからな い。	多少笑えるもの を含め、最低限 度の必要項目を 決めておく
45～65	グループ毎に代表を 決め、全体にメンバ ーを紹介させる。1G 約5分。	分かり難いところは、学生 ・教員が質問してよいこと にしておく。グループ毎に 黒板前に整列して。	
65～80	今日の「覚え書き」 記入		
80～90	次回の予定と予習用 資料の配布。		

「教養演習」実施予定表 月曜3限 E302 担当 久保

4月15日	オリエンテーション	目標：①この演習の目的と進め方を確認する ②「わが」同士の自己紹介
4月22日	グループ討論① 「わたしの学生生活 ー過去・未来」	目標：①高校と大学の違いを確認する、②自 分は大学で何をしたいのかを確認する
4月29日	休講=みどりの日	
5月6日	休講=振替休日	
5月13日	グループ討論② 「わたしの職業観」	目標：①自分ほどのような職に就きたいのか を考える、②そのためにはどのような準備が 必要か考える 目標：学内の各施設に実際に足を運び、その 利用方法等を理解する
5月20日	学内見学（図書館、レポー トセンター、健康管理中心、研修 会館、大学院、就職課など）	
5月27日	輪読会① 「ノート・テイクの技術」	目標：①大学の講義ではどのようなノートをと ればよいかを調べる、②文献から必要な情報 を読み取る
6月3日	グループ討論③ 「わたしのマナーは乱 れているか」※この回は 「近未来映画」を題材とし て行う	目標：①キャンパス内外で指摘されているマ ナーの乱れの例を考えてみる、②それはなぜ起こ っているのか、それらをなくすにはどのような ことが必要か各自の考え方を明らかにする 目標：大学でしばしば課される「レポート」の書 き方・まとめ方を文献から読み取る
6月10日	輪読会② 「レポートのまとめ方」	
6月17日	輪読会③ 「プレゼンテーションの技術」	目標：自分の考えを一定時間で他の人々に説 明するための準備、方法を文献から読み取る
6月24日	その他	
7月1日	「近未来計画」 プレゼンテーション①	目標：①大学生生活及び卒業後の自分の近未来 設計について報告する、②実際に、自分の考 えを一定時間で他の人々に説明する
7月8日	「近未来計画」 プレゼンテーション②	同上
7月15日	総括 ※この回は「近未来映画」を 題材とする	目標：この演習を通じて得られたこと、考え たこと等をそれぞれ出し合う

教養演習 グループ討論 「わたしの学生生活—過去・未来—」 論点予習用紙

* 次の各論点について、それぞれ30秒程度で自分の考えをまとめてみよう。
30秒はけっこう長いかもしれない。実際に時間を計ってやってみよう。

この時間の討論の目的:

自分の進学理由を再確認し、大学生活における目標を明確にする。
高校時代の生活と大学生生活の違いを考える。

・ あなたは高校時代どんなことに力を入れてきましたか。

① 部活では？

② 勉強では？

③ その他のことでは？

・ あなたはなぜこの大学を選んだのですか？

・ 高校時代と大学生生活との違いはどんなことだと思いますか。？

・ あなたは大学生生活でどんなことに力を入れてやってみたいと思いますか？

第二回	グループ・ディスカッション (GD)	「私の学生生活—過去と未来—」	名札を持参、配布のこと。
時間経過	項目	内容	注意点
0～15	挨拶、出欠確認＝「覚え書き」返却、課題と進行について、グループ分け		全回と異なった基準でグループ分け。
15～60	GD	前回配布した具体的論点について各自が考えてきた答えを出し合い、それを踏まえて、議論を深める	各グループに司会を選ばせ、進行させる。
60～70	グループ毎に代表を決め、討論の内容を報告させる。1G約5分。		
70～80	まとめ、次回の予定と資料の配付。	報告を聞いてのコメント。GDについての資料を配付し、次回のGDまでに全員読んでくるよう指示する。	資料等をまとめ、配ておくため、クリティカルA4を購入するよう指示。100円ショップにもあり。
80～90	今日の「覚え書き」記入		

教養演習アンケート

4ヶヶ月ほどでしたが、この「教養演習」を受講してどのように感じましたか。この演習についての皆さんの素直な意見をうかがいたいと思います。

各項目について、以下の要領で1～4の数字を()に記入してください。

また、用紙右端の《 》の合計も記入してください。

全くそう思う…1 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

- 1 大学に進学した目的がいつそうはつきりした。 ()
- 2 大学で学習したいことがいつそうはつきりした。 ()
- 3 就職の方向性がいつそうはつきりした。 ()
- 4 就職の準備について関心を持つようになった。 ()
- 5 4年間の大学生活のイメージが具体的に変わった。 ()
- 6 口頭発表の仕方の訓練になった。 ()
- 7 文章表現の訓練になった。 ()
- 8 議論の仕方の訓練になった。 ()
- 9 大学施設の利用の仕方がわかった。 ()
- 10 教養演習で使われた教材は有益だった。 ()
- 11 教員と身近に接することができた。 ()
- 12 同じゼミの学生と身近に接することができた。 ()
- 13 大人気の講義と違い少人数だからよかった。 ()
- 14 講義よりも真剣に勉強できた。 ()
- 15 資料調べや発表は重い負担であった。 ()
- 16 教員は学生と効果的にコミュニケーションを行った。 ()
- 17 教員はこの演習に熱心だった。 ()
- 18 教員はこの演習の準備を十分にしていた。 ()
- 19 教員は学生に適切に助言を与え、相談のつづくれた。 ()
- 20 教員は私のことを一人の個人として関心を示し尊重した。 ()
- 21 この演習の目的ははつきりしていた。 ()
- 22 教室の設備は演習にふさわしいものだった。 ()
- 23 こうした演習を、来年度の1年生にも受けさせたい。 ()
- 24 こうした演習は、前期だけでなく後期まで行った方がいい。 ()
- 25 この演習を履修してよかった。 ()

* この演習について感じたこと、考えたことなどを自由に書いてください。

表面にわたってもかまいません。

1～25までの合計

()

平成13(2001)年 月 日 () 時 限

体育学部 氏名 ()

() 学科 () 専攻 学籍番号 ()

きょうの課題

きょうの演習で考えたこと

(きょうの課題を通して、あるいは他の人の意見を聴いて、感じたこと、思ったことなど)

担当教員のコメント

サイン又は印
基礎演習おぼえがき用紙